

# 自伝的小説の記録

—— 中野重治『むらぎも』にみる戦後日本の知識人 ——

後藤美緒

## 1. 問題関心

本稿は、近代日本における知識人と大衆の関係を、小説という文学作品を構成させる力学から考察することを目的とする。なかでも、激変する政治状況と思想文化の変化を背景に、戦前から戦後にかけて作家として活動した中野重治〔1902-1979〕の執筆活動とその作品『むらぎも』(中野重治 [1954]1978) についての分析を行う。

現在、様々な形態のテキストをわれわれは観察することができる。文字テキストで構成される文学は種類も豊富に、さまざまな流通経路を保持し、とりわけ、小説という形態は多くの人々に読まれるとともに、その書き手に高い権威が付与されている。

近代日本の文学では、高学歴の男性を書き手に、書き手の内面を語る私小説に高い芸術的価値を置いてきた。そして同時に、国家体制との距離のとり方もまた、戦争を経験することによって、文学の重要な課題となっている (Keene, Donald 1984a=1999a, 1984b=1999b)。

本稿で主題的に取り上げる中野重治、およびその作品群は、近代日本文学におけるこの二つの特質にあてはまる。戦前から共産党と関係の深かった中野が戦前に発表した「芸術に政治的価値なんてものはない」(中野 1929) による論争や、戦後すぐの1946年から1947年にかけて、平野謙や荒正人との間に起こった「文学と政治論争」がそれを物語るだろう。

中野は生涯を通じて多様な執筆物<sup>1)</sup>を残したが、旧制高校から東京帝国大学に進む戦前のエリート教育の享受過程のなかで書き手としての履歴を開始した。帝大在学中は学生運動団体である東京帝大新人会〔1919-1929, 以下新人会〕に所属し、社会科学運動に従事した。作家、そして社会運動家としてのキャリアはこの時期に準備されたと理解できる。そして、まさにその時期を想起させる作品を中野自ら表したのが、本稿で取り上げる『むらぎも』という小説である。

そのため、小説『むらぎも』は、文学研究者によって著者の自伝と認識され、また教育社会学者たちからは戦前の学生動向を描く資料と捉え用いられてきた。小説には、主人公の大学生が労働争議の応援に参加し、自身と労働者との活動や

文学仲間との間に齟齬が生じている様子が描かれる。事実、中野は在学中、新人会員として小石川の印刷労働争議に参加した。では、小説『むらぎも』は著者の政治的成長を記した「自伝的小説」なのだろうか。

著名な文学賞受賞作品に想起されるように、時代を言語で書き留める文学作品は同時代の空気を強く感じさせる。同時に、観察し、記述する存在としての文学者たちの存在が日本社会で重視されていたことをうかがわせる。こうしたことは、なぜこの時期に、文学作品という形で時代を切り取られるようになったのかという問いへ開かれることができる。

以下で明らかにするように、中野の執筆行為とは、自身の経験を想起することで、経験を作り変えること、そして、テキストの形で読者に思考法を開示することで、読者へ働きかけ、社会を変えるものであった。中野は、回想＝想起することを知識人の役割として引き受け、伝えることを行った<sup>9)</sup>。

著者の経験を30年経て、そして戦後10年近く経て書かれた小説『むらぎも』は、出来事の内容を記録すると同時に、個人の経験を記したテキストであり、そして社会の記憶の仕方を問うメディアでもある。

中野が所属した新人会の会員らはその後、政界やアカデミズムなど様々な領域に進むが、それらはことばとのかかわりが深いものである点で共通している。一例を挙げれば、戦後、斬新なキャッチコピーで世相を分析した大宅壮一〔1900-1970〕や、漫才という大衆演芸を変革した秋田実〔1906-1972〕らが戦前に新人会に参加していた。そのなかで、中野は、在学中から本名で、政治と文学の関係に焦点を当て、社会科学の機能を問いつづけた。本稿では新人会で培った経験が、彼のその後の人生でどのように生きられてきたかを明らかにすることを通じて、知識人の一形態を描き出すことを試みる。

## 2 先行研究の検討

中野重治をめぐる研究は、研究者はもとより、作家や批評家たちによっても、中野の存命中から行われている(木村幸雄 1979, 松下裕 1998, 満田郁夫 1981, 小田切秀雄 1999, 大江健三郎・柄谷行人 1994, 杉野要吉 1979)。なかでも、2000年前後は、日本近代文学の領域で研究が充実してきたといえるだろう。

例えば、竹内栄美子は、中野重治を文学という言葉の芸術にしたがって、「戦後の流れや相」について描き、批評した人物ととらえ、中野重治の著作によりながら、戦後日本の諸相を見直し、文学表現による時代への批評精神を確認すること企図している(竹内 2009)。1945年から、中野が死去する79年までの、中野の評論や小説を読み解く竹内は、中野が敗戦や朝鮮戦争といった国内外の情勢や、戦後の中国旅行や共産党除名といった中野個人の経験といった現状の様々な状況に対して、テキストを発表することで、出来事の背後にあるものを剔抉してきたと論ずる。

また、M・シルババーグは、中野の戦前における詩作に着目し、「歌の変革＝変革する歌」という概念を用い、マルクス主義批評家として中野を捉え、日本マルクス主義者の見解を大正時代の文化の中に置く方法を示唆する。シルババーグによれば中野の詩作はその政治的成長にあわせ、歴史の発見、大正文化の再生産、革命のダイアローグ、歌の終わりの四段階に分類できる。

M・シルババーグの「歌の変革＝変革する歌 (changing song)」とは、日本の伝統に置ける〈うた〉が歌(メロディ)と詩(意味)両方を指し、替え歌が〈もと歌〉の歌に異なった歌詞を組み合わせ、新しく考える動きに着想を得た概念である。この概念をもとに、M・シルババーグは、中野にとって詩を作ることは社会の替え歌を作ること、いわば詩作を通して社会を作り変えることを意図していたと論じる。そして、中野は文化の政治が国家的あるいは歴史的境界を無視する近代の科学技術によって変形させられて歴史的時期に、文化に対する自らの理論を政治的实践におこうと勤めたマルクス主義革命家であり、それはW・ベンヤミンやM・パフチンらの著述と同型をなしていることを指摘し、中野を全世界的な1920年代の知識人として見出す。一方で、中野の戦後の著作は彼が深く関与した共産主義的左翼が公的・私的な官僚制組織に組み込まれたため、直接的な社会革命を求める宣言としては読めないとする。

両者は扱う時期こそ異なるものの、テキストを通して中野が人びとの生きる状況を観察し、その結果を様々な形式のテキストで戯画的に描くことで、人びとが生きる状況を変革しようとみなす点で共通している。本稿もまた、中野の執筆活動を変革するものととらえる点で二人の論者に続きたい。

だが、だからこそ論じるべき課題が提出される。両者は一人の人物の営為を戦争をはさんで別個に扱っている。しかし、中野の生と執筆行為は戦争を経ることで分断されておらず、したがって両者が見出した批評精神は一生の営みの中で取り上げる必要があるだろう。竹内が論じる日本の戦後は戦前に端を発したのであり、中野の発想の根源はさかのぼる必要がある。また、戦後、ヨーロッパの知識人たちが全体主義について論じたことを考慮すれば、M・シルババーグの時間射程は延ばして論じる必要があるだろう。

その際、M・シルババーグの「歌の変革＝変革する歌」という、中野の思想と執筆行為を連動させる概念が有効であろう。政治や経済状況が大きく変化するなかで中野は一貫して執筆活動を続けており、しかも、その方法は大学時代を経て詩から小説へと変化している。すなわち、形式の移行が起こったととらえることが可能であろう。

近代日本の知識人は、戦前／戦後の国家体制の連続性を支えたと論じられて久しい[思想の科学 1959, 1962 a, 1962 b, 筒井清忠=1984=2006, 赤澤1995→2001, 山之内1981, 1993]。こうした歴史観を共有して既出の文学研究は、職業としての作家を取り上げる際、菊池寛やロマン派を積極的に関与した作家、永井荷風らを態度留保する形で非関与を貫いた作家と位置づけ、中野をはざ間の存在

としてとらえ、作品および作家論を展開してきた。

本稿もこの位置づけに負い、中野の職業としての執筆の様相を、小説『むらぎも』を中心に、中野の執筆した評論、自己解題などを資料として中野の書くことと形式について考察し、中野が小説を通して検討してきた戦後知識人を描くことを試みる。

以下では、まず小説『むらぎも』の記載事項を検討して、小説の構造と特質を明らかにする（第三節）。つぎに、書くこと全般についての中野の認識を確認する（第四節）。そして最後に、1954年に小説を書くことの意義を検討し、中野が小説『むらぎも』を通して試みたことを明らかにする（第五節）。

### 3 テクストのなかの新人会—小説の構造をめぐって

#### 3.1 小説『むらぎも』

『むらぎも』は1954年1月から7月にかけて、雑誌『群像』に掲載された、原稿用紙600枚におよぶ長編小説である。毎号、いくつもの小説や評論が掲載される『群像』の中で、『むらぎも』の目次は枠囲みの白抜き文字で記載された。この表現が多様されたことから、読者に書かれることの重大さを読み取らせようとする雑誌編集側の意思が推察される。

小説は、戦前の東京帝国大学に通う一人の男子学生の、大学を卒業する直前の一年間を描く。主人公の片口安吉は、新人会という帝大生のみで構成される学生団体に所属し、その会員たちが共同生活を営む「合宿」で起居している。マルクス主義の理論の研究と実践活動を行う学生団体である新人会に所属する安吉は、新人会主催の勉強会に参加するが、交わされる内容の理解がおぼつかなく、会員たちの勤勉な態度に好意を抱きながら、違和感を抱く人物である。そうした安吉も、物語の後半では実践活動の一環として共同印刷の争議に参加し、労働者争議団と共に数ヶ月を過ごす。同時に、安吉は文藝サークル『土くれ』の同人であり、同人仲間としばしば酒を飲み交わしながら芸術論を真剣に交わし、物語の後半では文壇の大御所である葛飾新太郎に呼び出され、文学を続けることを確認されるほどの才能をもった人物である。マルクス主義を学ぶ政治的側面と、文学の才能という芸術的側面を持ち合わせた人物として安吉は描かれる。両側面は争議団を経験することで、それぞれの仲間たちの示す見解とはことなる方向を安吉に提示したことが描かれる。そして、その変化に気づいたことを伝えようと労働争議の際に世話になった労働者夫婦の家に、大学卒業の日に訪ねていくところで物語りが閉じられる。

このように書く『むらぎも』を主人公の青春記ととらえることも可能である。だが、ひとたび小説の構成に着目すれば、書き手が凝らした趣向から、読み手に付加を与えていることが判明する。以下ではそうした趣向を確認したい。

### 3.2 小説を構成する文章技法－内面の記述、回想の多用

読み手が、まず、意識させられるのが登場人物の多さである。それらは名前を与えられている者から、そうでない者と多岐にわたる。

作中の登場人物で名前を与えられている者は、安吉が所属する新人会と土くれのメンバー、そしてそれらに深くかかわる人々である。そうした人物は、生業や経歴を書き込むことで実在のモデルが特定可能な人物造形がおこなわれている。たとえば、書き手である中野重治を想起させるのは主人公の片口安吉であり、新人会の合宿所の管理を引き受ける藤堂は石堂清倫、会のリーダーである太田は大間知徳三、文学仲間の鶴来は窪川鶴次郎、葛飾新太郎は芥川龍之介という風に、新人会員や文学仲間の大多数が人物を特定できた<sup>44</sup>。中野のこうした人物造形に関して、モデルと目される人物や批評家たちから、自分と他の会員とを混同していることや、現状では決別している人物も、かつての「非常にいい人間」像が描かれることが指摘されている<sup>45</sup>。

一方、名前の与えられなかった者たちもいる。合宿を運営する寮母や、安吉が労働争議で間借りした若い労働者夫妻、大学構内で追い越した肉感的な若い女性、爵位をもつ会員の家で給仕する老女、牛乳配達夫らがそれにあたる。そうした人物の衣服や髪型、しゃべり方を通して、安吉は彼／彼女らの背後にある経済上の苦難や生活上の知恵について思いをめぐらし、彼／彼女らが置かれた状況の解釈を試みる。

たとえば、寮母をめぐって安吉は、彼女の境遇を想像しながらも、彼女がそれに対して卑しさもなく、生活を楽しむ術をもっていることを驚きと親愛の情を持って描く。

不仕合わせを不仕合わせとしておばさんが受け取っていないのではないか。それは受け取っているけれども、同時に一刻も、生活をよろこぶということを実際の上でやめない。味付けした材料を一枚一枚くるんで、そのキャベツを爪楊枝で止めて、それにどろっとしたものをかける操作に溺れているような彼女。油揚げを三角に切って、それを破れぬように気を使って開いて、そこへ五目飯をつめて一心に稲荷ずしをつくっている彼女。思いついて、そこへ麻の実をいれたことだけできがやいてしまっている彼女の顔。どしゃ振りや雨漏りがはじまり、洗面器だの洗い桶だのを持ってかけつけて、そのとき、とばかり防ぎに雑巾を投げ入れたことで一人で気持ちよくなっているこの女。

安吉が新人会や土くれのメンバーと交わすいずれの議論においても参加することもないこうした人々を描くことによって、中野は会員らが勉強会で取り上げる労働者階級とひとくくりしては見えなくなる多様な層を記す。

登場人物の名前の作為性と同様のことは日付にも行われている。物語のクライ

マックスでもあり、安吉が労働者の生活を目の当たりにする共同印刷争議への参加は、作中では安吉の大学3年の冬であるが、書き手の中野は実際に大学2年の冬に参加している。また、安吉が新人会の見解に戸惑う様子が描かれる、学内思想団体七生社との対立も、中野自身、新人会員として学内集会で演説を行うなど積極的に参加している。日付や出来事は学内ニュースを記録した『東京帝国大学新聞』など調べれば異なっていることが判明するものであり、『むらぎも』は人物造形や日付の操作など、とりわけ新人会にかかわる部分で中野の意図的な記述が散見される。

つぎに取り上げたいのが、作中における回想の多様である。たとえば、前述した名前の与えられない人物である大学構内で安吉が追い越した女性が記述される時、安吉は文学仲間との会話を、女性を「追い越す非常に短い時間」に思い出す。そして、女性を追い越して目的地に着いたとき、自分が直前に参加した新人会の歓迎会で「ケッタクソわるい……」思いをしてきたことを思い出し、と同時に同じような気持ちになった、合宿に入る前の寄宿舎での生活を思い出すのである。大学入学以後の、近い過去とも言うべき事柄が、連鎖的に、複数想起される時間の管理がおこなわれる。しかし、思い出されるのはそうした近い過去ばかりではない。自らの違和感の説明を求めるときに、安吉は自分が福井で過ごした中学入学までの期間、大学入学移行と比べると遠い過去も思い出している。それは、安吉の政治的感覚や芸術的感覚の規定になるものとして描かれる。

そういう世界〔労働争議の意義を認めつつも、応援する際の経済負担が大きい労働者の世界。引用者注〕がなんとなく彼をひきつける。安吉自身その中にはいない。そこに生活の根拠はない。いつかそこに生活が根拠を持って移されるとも思われぬ。しかしそこに、子ども以来なれてきた百姓の仕事なりに通じるものがある気がした。(略)「主義」以前の生活の事実がそこにあって、その中で休めるような気が安吉にする。

このように、現在から複数の過去を想起し、かつ、それが何度も作中で繰り返されるのが、『むらぎも』の特徴である。

そして、回想で際立つように、小説は主人公の内面を読者に読み取らせる技法が用いられる。物語は代理で引き受けた家庭教師先に向う不安から始まり、それは文書において内面をあらわす鍵括弧〔「 』〕表記で始まる。

「家庭教師か。どんなやつが出てくるんだろう……でも、妙なもんだなア。変だなア、代理の家庭教師なんてもの…」／谷中清水町の合宿から、藍染橋の谷間へ一たん降りて、根津八重垣町から本郷台へと上っていきながら、これから出かけていく追分合宿での仕事のことを、何か照れた気持ちで安吉は頭に浮かべた。

そして、物語の終わりは三点リーダー〔……〕で終わる。

おしめの渴きがよくなってきて、細君のほうで勝気に見えたあの細君がだいぶ助かってきたらうと、安吉自身ほっとしてそれが思われてくる……。

第四に、短い挿話が集合してひとつの章を形作っていることがあげられる。第四章では、毛学生、ヨイトマケ、片山のフィアンセ、総長問答といった詩的なタイトルが冠された12の断片が集まって一章をなす。日本語の文章は現在時制と過去時制を混合させた文章が読みやすいが、この章ではそうした時制よりも語尾の音を統一する、いわば韻をふんだ表現が多用される。こうした技法は中野の自伝的小説とみなされる『歌のわかれ<sup>(7)</sup>』（中野 1939）でも取られた方法である。

このように、『むらぎも』は主人公安吉の内面を描く文章技法を用い、そしてしばしば安吉の回想が挿入される形態を取っている。また、実際に起こった出来事に対しては時間の、人物については呼称の変更が加えられている。多数の技法を編み合わせた作品を同時代の批評家たちは「物語のない物語<sup>(8)</sup>」と評価した。

こうした技法から見出せる中野の創作の意図を考えるにあたって、中野の読者たちが有していた前提事項を確認することが重要であろう。

1954年において、すでに中野は多数の著作を抱え、論争に参加し、戦前から論壇を担う一員であった。あわせて、戦後すぐの1947年には、天皇制について友人の共産主義者へ手紙で問いかける『五勺の酒』（中野 1947）を発表し、自身の経験を小説に投影する作品を発表していた。つまり、『むらぎも』が執筆された1954年当時の読者たちは、中野の経歴について多少の情報を持ち合わせていた。だからこそ、読み手たちは『むらぎも』を中野の自伝として読むことが可能であった。しかし、一方で小説の中に描かれた人物をはじめ、中野と時代をともした人々は、描かれた事柄と実際の事柄が異なっていることも知っていた。そして、それは文学評論でも述べられ、一般の読者も広く知ることになった<sup>(9)</sup>。つまり、読み手がこれまで知りえた中野の経歴と小説における虚構をテキストの中で合わせることによって小説は、何が事実かをわからなくする配列効果を企図されていたことがうかがえる。

そうした文体の採用について、中野は次のように語る。

「むらぎも」のほうは、1954年になって、つまり戦後9年もして書いて私は発表した。話の材料のときで言えば、「歌のわかれ」「街あるき<sup>(10)</sup>」はことから13、4年して、「むらぎも」は27年して書いている。作者の年齢から言えば、前の二つは年37、38で書き、「むらぎも」は52年になって書いている。自然そこで、それを書くつもりでいて、書きこみ忘れたことがいくつもあり、なんとしてでも書くつもりでいて腰がふらついてとうとう書けなかったこともあれこととあった<sup>(11)</sup>。今となっては、それが何で、どの辺のことだ

ったか正確に指せぬ状態でもある。(中野[1959]1976)

中野は出来事から時間がたち、当初書く予定でいたが書き込み忘れたこと、書けなかったことそれ自体がどこかも正確に示せないと、明確に読者に理由を提示しない。作品を提示することで、中野は読み手にその真意を推察することを要求する文体を取っていたのである。

## 4 小説という形式

### 4.1 文学者として書くこと

ところで、中野にとって書くこととはどのように意識されていたのか。以下の、『むらぎも』執筆直前の1953年に編まれた評論集『話すことと書くこと』の巻頭言は、中野の書くことをめぐる意識を推察させるものだろう。

話すこと、書くことは、人が自分をたしかめ、他人とのふれあいでも自分をたしかめ、他人をも確かめていく仕方である。これは、ひとりごつの場合でも、他人に見せぬ日記とか覚書きとかいうものの場合でも、すべてそうである。それだから、話すにはどう話すか、書くにはどう書くかを研究することは、人間として自分をたしかめ、他人をたしかめ、それによって自分が正しく行動し、他人と組んで正しく行動し、こうして人間としてのたしかかな生活をして行く生き方を研究することである。／(略)／わたしは現代日本の文学者の一人である。そういうものとして私は生き、発言し、ものを書いている。(中野 1953: 1-2)

話すことや書くことといったことばの表明を、中野は自己と他者とを確かめる方途であり、公開の有無に関わらず厳重に扱うこと、そして文学者の職務として向き合ってきたことを述べる。

ただし、中野は同論考中で自身を「新日本文学会の積極的な分子として働いている」と定義しているように、ここで提示された文学者であることは明確な意志に基づいていたことと理解されなければならない。戦時中、日本の文学者たちは執筆機会を得るためにも日本文学報国会に所属し、文学の面から戦時下体制を支える役割を担っていた。戦後、組織が解体した後、政治に従属しない文学の創立を目指す近代文学<sup>(12)</sup>と、民主主義的文学の確立を目指す新日本文学<sup>(13)</sup>が組織される。1953年において中野は新日本文学会の編集長に就き、機関誌の方向性と編集責任を負っていた。すなわち文学者であることは新日本文学の方針に従うことを意味していた<sup>(14)</sup>。その中で、中野は各地に起こったサークル運動の支援や指導を行い、日本の朝鮮戦争参加を批判する「朝鮮の細菌戦について」(中野 1952)を執筆している。



中野を含め新日本文学会は新旧の共産党員が多く参加していたが、この時期、共産党を含め、国内の政党および政治は国際状況との対応の中で独自性を模索していた。終戦後、どのような社会を構想するか日本全体が模索するなかで、中野は文学を通じて、民主主義の内実とその生成方法について結論を導きだそうとしていたのである。

#### 4.2 詩から小説へ－移行する形式、連続する意識

書くこと一般についての中野の見解を確認した。では、それを表現する形式や内容について、中野はどのように考えていたのだろうか。詩から小説へという形式の移行は『むらぎも』執筆を考える上で重要であろう。

書き手として中野のスタートは短歌や詩から始まっている。だが、中野は戦後、詩を書いていない。唯一、1947年に日本共産党創立25周年大会で朗読した「その人たち」が戦後の作品としてある。

こうした状況に対し、中野は詩集のまえがきなどで、詩が書きたいが書けないことを吐露している。そして、詩を書くことを「天職」としていた中野は、「私は来年四十になる。たぶん四十になれば私にも詩が書けよう。思ってみるだけで胸のふるえる仕儀である」(中野[1940]1978)と、自身が年を重ねることによって書けるだろうと読み手に弁明する。しかし、実際には中野は新たな詩作を行えなかった。だが、中野は作品の重複した詩集や全集を生涯何度も刊行する、いわば詩の刊行を続けていた<sup>49)</sup>。

刊行を通して中野が訴えたのは、結論を先取りして言えば、人びとの営みに干渉する国家の存在である。たとえば、雑誌掲載時からもはや意味を読み取れないほどの大量の伏字があった「雨の降る品川駅」は、共産主義運動にかかわり故国に送還される朝鮮半島出身者の労働者を励まし、連帯を謳う詩である。労働者の現状を描く詩が収められた最初の詩集は、印刷・製本の過程で国家による発禁処分を受けた。つまり、中野にとって繰り返し刊行することは人びとの営みに対し、強い力を行使する存在として国家があることの提示を試みていたと理解できる。

それと並列して、中野は詩ではなく散文の形で、1956年前後、文学の仕事に携わっていることを記述する。そして、文学の基点にあったのが1925年から1927年の学生期の体験であったことを記述する。

1925、6、7年ころ、私が一人の大学生であった当時、日本の社会は全体として揺れていた。その深さ、その振幅は知らなかったけれども、それでもそれは私にも響いてきた。ある大学生達は、男女とも、ある労働者たちといっしょになって人生に出て行こうとしていた。労働者階級の行動、労働者階級の哲学ということは、一方では社会・政治革命の道についてのイメージ[ママ]を私達にあたえ、他方では、革命芸術についての、労働階級の芸術についてのイメージ[ママ]を私達に与えた。そこで、文学を自分の仕事としようとし

て思ってきた私は、プロレタリア芸術運動の中へはいることになった。室生犀星との近づきのうちに育てられたものが〔人生に対する正直な態度、引用者注〕—何かが育っていたとすれば—それがここでいくらかでも出てくるようになった。そこの経過のうちにこれらの詩が生まれたのであったと思う。／それが詩の形で出てきた時間は私には短かった。つまり私は、詩をしばらくの間だけ書いたことになる。その後は、私はおもに散文の形で書くようになって今に及んでいる。／（略）この程度のもので、人が読んでくれるならばやはり私は感謝するのである。〔下線部は引用者〕（中野[1956]1978）

ここで記された1925年から1927年にかけて、中野は大学に通い、新人会に参加した。中野はしばしば、この時期の経験は、新人会の活動をオーバーラップする形でその後の人生を形作ったことを語っている（中野[1938]1978, [1954]1978）。それが強く表明されるのが以下の論考であろう。

新人会を巢立った学生、この若い青年たちには多くの弱点があった。ねばりの薄い理想主義とロマンチズムとが弱点のひとつであった。しかし彼らが日本の民衆、とくに働く国民の目をさまそうとして努力は省みられてよく、またそれほど弱かったわけではない。／新聞は街へ出てきた天皇について語っている。「国民が天皇と相対して困惑するよりも、むしろ天皇のほうが国民と接触して当惑してきたように思われる」と。また「天皇は周囲の群衆に対し神経質かつ不安気である。これは3月8日の夜日本全国にラジオで放送された。新聞はこのことについて理由説明をしていない。新人会はその思い出において理由説明するのである。／（略）不敬罪廃止を持ち出すことの醜さを国民の生活から一掃するため、学者と芸術家とを国民生活に結びつけ、国民のあいだから無数の質の高い学者と芸術家とを生み出すため、国の方針への背反として学芸封鎖経済政策が廃止されなければならぬのだ。

（略）／このように新人会はその思い出において教えるのである。〔下線は引用者〕（中野[1946]1979）

「思い出」「思い出す」といった、一見すると新人会を過去に置きとめる表現を用いるものの、そこを基点に、反省的に、現在の思考と未来の解決法を提示するこの論考は、中野にとって新人会が決して過去の出来事ではなく現在も続いていることが示される。その方法は、『むらぎも』に描かれた過去との対話法と同形を示す。

しかし、その経験の中野は1937年ごろから表したいと願っていたものの困難で、「記憶が私に群がって呼び起こされ」、「悔恨を悔恨が中心に、愚昧、怠け、臆病の連鎖が立ててきて全身に絡んだ」（中野 1959）と語る。すなわち、文学者として最も取り組みたい詩や自身の経験が書けずにいる時に書かれた『むらぎも』は、

中野自身が過去の体験を客観視する作品であったと理解できる。

そこで書かれた内容、および文章技法は第三節で確認したとおりである。第四節を踏まえて再度『むらぎも』の技法を確認してみれば、中野の詩における内容および技法と、小説が連続していることを見出せる。たとえば、先に紹介した寮母は、名詞止めの文の強い拍節を持った文体で表現される。また、短い挿話につけられたタイトル、登場人物の内面を想起させる回想や文体といった技法も用いられ、それは中野の詩の持つ文体と近似する。

中野は『むらぎも』で、大学時代に起こったことをすべて書きとめたわけではないと述べる。むしろ、次のように創作をしたことを認める。

「むらぎも」に取りかかったときの私は書くことが山のようにあると思っていた。しかし取り掛かってみて決して事がそうは運ばぬことに気づいた。大学の時期のたった一切れの断片、それさえ書くとなればわからぬだらけの有様だった。私は私の経験に即して、しかしあれこれと考えたり格好をつけたりして書いた。(中野[1959]1976)

タイトル「むらぎも」は心の働きは内臓の働きによると考える思考法、五臓六腑を指す。小説の構造に着目すれば、そこでは様々な技法を用いて一篇の長編小説が作り上げられている。そうした個別の技法を編み合わせることで中野が目指したこと、それは回想＝想起することで自身の経験を作り直すことであり、中野の取った思考法の習得を読み手に求めることであった。そのため、小説『むらぎも』は自伝の形態をとった創作小説であると結論付けることができる。

## 5 終わりに

本稿が確認してきたように、小説『むらぎも』は、読み手がこれまで知りえた中野の経歴と、小説における虚構をテキストの中で合わせることによって、何が事実かをわからなくすることが中野によって企図されていた。また、中野のそれ以前の執筆活動を参照すれば、内容と技法の面において、連続性が確認できるものであった。付言すれば、小説『むらぎも』は自伝に姿を擬態させることで、読み手に作者の取った思考を追体験させることをめざす、啓発的な意図を持ったテキストであったといえるだろう。

しかし、なぜ小説でなければならなかったのだろうか。最後に、1954年に小説という形で自らの経験を書くことの意義を検討したい。

1950年代は朝鮮戦争の勃発を皮切りに警察予備隊が結成され、日本の再軍事化が国外状況に合わせて進攻する。国内では、1952年からレッドパージが始まり、終戦直後の共産党が称揚された時期も去り、共産党を初めとした政党の方針が模索され、その後五十年以上続く55年体制へと整備されようとしていた。そして、

『経済白書』は56年に「もはや戦後ではない」と記す。つまり、55年前後とは戦前と戦後が明確になる時期だったといえよう。そうした時期に戦前の自身の経験を書くことは、中野にとって戦後を始めることであったと考えられる。

そうした状況下で文学は、占領軍の検閲制度はあったものの、文壇と戦犯作家の復活、雑誌の反乱に始まり、若手批評家たちによる共産党の指針に乗る文学者への批判と論争があつて花開き、それが書き手たちに文学に課せられた役割を強く自覚させることになる。しかも、戦後の社会を作るための青地図が日本社会には必要だった。だからこそ、情緒的に理想を謳う詩ではなく、事物をつなげる物語性を持つ小説が求められたといえるだろう。中野の執筆動向はこうした社会の状況に合わせて対応したものであり、その点で読み手たちを広く意識したものであったといえる。しかしながら、そうした意図に反応したのは、新人会員や作家、批評家たちであった。岩波文庫に中野の作品が治められているものの、現在、中野の作品はそれほど人口に膾炙していない。戦前から中野が切り開こうとしてきた大衆との関係は、小説に反応できるという留保がつけられるものになっているだろう。

中野重治とその小説『むらぎも』を検討することは、文学を活動の場とした戦後の知識人を再考するものであろう。

## 【注】

- (1) 詩、評論、児童文学、国会演説集など多岐に渡るテキストを中野は執筆した。それらは現在、1976年以降、筑摩書房から刊行された全28巻になる『中野重治全集』で確認できる。
- (2) むろん、文学においては知識人の責任問題は、戦争に関連して終戦直後から行われている。こうした動きに刺激されるように、さらに、戦争に関しては一兵士や銃後の人びとなど、当時様々な立場や状況にいた人が書き手となるような書き手層の拡充が生じた。これに対し、学生運動の体験は戦前戦後を問わず、代表的な文学作品しか生じさせていない。つまり、小説『むらぎも』を検討することは、学生運動に対する近代日本の特質を指摘することにもつながるだろう。
- (3) 大宅壮一、秋田実（本名 林広次）らと中野の東京帝大在学期間と接点は以下の通りであり、在学中の接点は低いと考えられる。大宅壮一〔1922-1924〕。中野重治〔1924-1927〕。秋田実〔1928-1932中退〕。中野は1924年新人会主催の学内講演会で大宅の講演に圧倒された経験を持ち、1930年の「戦旗防衛3000円基金募集」講演で日程を共にする。また、秋田と大宅は大阪同郷を縁に、1930年代初頭の大宅の秋田への仕事の融通や戦時中の渡満など、つながりが深い。中野と秋田は、ともに戦前の共産党機関誌『戦旗』同人であったが、明らかな接点を見つけることは難しい。しかし、重要なのは、三者が様々な形でことば

を編むことを職業としたことであり、そこに新人会の特異性を見つけることができるだろう。

- (4) 作中の人物は以下のように対応する。新人会会員ら〔作中〕片口安吉（主人公）－中野重治，太田－大間知篤三，平井－中井精一／中平解，森－杉捷夫，佐伯－林房雄，織田東－佐野碩，藤堂－石堂清倫，沢田－大河内信威，伊納－勝木新次，山添（兄）－曾田。〔本名〕吉川－吉川（変名 二木）。共産党の理論家，岩崎－福本和夫。文学仲間ら，鶴来－窪川鶴治郎，斉藤－室生犀星，葛飾新太郎－芥川龍之介，辰野隆吉－青野季吉，田部楨－片山伸。
- (5) 以下の文献を参照せよ。会員同士の座談会（中平解他 1954）。批評家たち（阿部知二・佐々木基一・臼井吉見 1954）。
- (6) 紙幅の都合上，小説を忠実に再現することはできない。本稿では改行をスラッシュ〔/〕で表す。
- (7) 初出は1939年『革新』4～8月号。右翼的傾向を持つ雑誌ではあったが，新人会出身者が編集に関わっていたこと，その者が1937年以降，中野が執筆制限を受け経済的に困窮した状況に見かねたことによって執筆の機会が得られた。金沢の旧制第四高校に通う片口安吉が落第や飲酒，文学論を交わしながら，高等学校時代をすごす姿が描かれる。
- (8) 平野謙1954「中野重治むらぎも読後」『読売新聞』1954年9月18日付け朝刊6面。
- (9) 例えば，1954年に『群像』誌上での文芸批評は評者たちが中野の経歴をもとに批評を展開しており，中野の経歴はあたかも教養のように扱われている。（阿部知二・佐々木基一・臼井吉見 1954）。
- (10) 初出は1930年『新潮』6・7月号。金沢から帝大進学のために出てきた片口安吉が本郷界隈を歩きまわる様子が描かれる。
- (11) この理由として，戦時中，自身の活動経歴による経済的不自由さがあったことを述べている（中野 1976）。
- (12) 近代文学〔1945－1964〕。本多秋五・平野謙・山室静・埴谷雄高・荒正人・佐々木基一・小田切秀雄らが創刊。
- (13) 新日本文学〔1945－2005〕。蔵原惟人・中野重治・宮本百合子らが創刊。戦前の左翼系文学者団体が母体となるも，新しい民主主義文学の創造を呼びかけ，志賀直哉など広汎な執筆領域の人びとが草創初期に参加。
- (14) 中野は1949年1月に書記長に就任し，1954年9月から翌年4月まで編集長を勤める。1955年以降，事務局長に選出，1957年には副議長を兼任する。なお，事務局長は1962年に辞任する。
- (15) 1935年ナウカ出版社版。1940年新潮文庫版。1956年岩波文庫版。ナウカ版以前の1931年に詩集を発行しようとしたが，印刷・製本時に発禁処分を受けた。
- (16) 初出は「新人会の思い出は教える」『東京新聞』1949年3月10日付。旧版全集第15巻にはじめて所収。その際の現在のタイトルに改訂。

【参照・引用文献】

- 赤澤史朗，1995，「戦中・戦後文化論」『岩波講座日本通史』19：281-328，岩波書店。
- 阿部知二・佐々木基一・臼井吉見，1954「創作合評 むらぎも，山川艸木・冥府」『群像』（8）：228-240。
- 雨宮昭一，2008，『占領と改革』シリーズ日本近現代史7，岩波新書。
- 広津和郎，1989，「中野重治」『広津和郎全集』第12巻：525-526，中央公論新社。
- 平野謙，1954，「中野重治むらぎも読後」『読売新聞』1954年9月18日付け朝刊6面。
- ，1966，「人と文学」『中野重治集』現代文学大系36：472-493，筑摩書房。
- 石堂清倫，1989，『中野重治との日々』勁草書房。
- 井上俊編，1996，『文学と芸術の社会学』講座社会学，岩波書店。
- 河野基樹，2008，『文人の社会科学——守節と転向をめぐる精神史』審美社。
- Keene, Donald, 1984 a, *Dawn to the West, Japanese Literature of the Modern Era*, 2 vols. Holt, Rinehart and Winston, New York=1999, 徳岡孝夫・角地幸男『日本文学の歴史』15近代・現代編6，中央公論社。
- ，1984 b = 1999 b, 『日本文学の歴史』16，近代・現代編7，中央公論社。
- 木村幸雄，1979，『中野重治論——詩と評論』桜楓社。
- 松下裕，1998，『評伝中野重治』筑摩書房。
- 満田郁夫，1981，『中野重治論 増訂』八木書店。
- 中野重治，[1938] 1978「自作案内」『文藝』2月号，1978『中野重治全集』第22巻，筑摩書房。
- ，[1940] 1978，『現代詩人集』第一巻「中野重治詩集」はしがき，『中野重治全集』第12巻，筑摩書房。
- ，1953，『話すことと書くこと』東京大学出版会。
- ，[1946] 1979，「新人会の思い出」『中野重治全集』第12巻，筑摩書房。
- ，[1954] 1976，「むらぎも」『中野重治全集』第5巻，筑摩書房。
- ，[1954] 1978，「自伝」『現代日本詩人全集』第10巻，『中野重治全集』第22巻，筑摩書房。
- ，[1956] 1978，「岩波文庫版『中野重治詩集』後書き」『中野重治全集』第22巻，筑摩書房。
- ，[1959] 1976，「著者の後ろ書き ひとつの高等学校期とひとつの大学期」『中野重治全集』第5巻，筑摩書房。
- 中平解・大間知篤三他，1954，「小説『むらぎも』と新人会時代」『中央評論』(36)：76-86，中央大学中央評論編集部。
- 小田切秀雄，1999，『中野重治—文学の根源から—』講談社。

- 小熊英二, 2002, 『〈民主〉と〈愛国〉』新揚社.
- 大江健三郎・柄谷行人, 1994, 「対談 中野重治のエチカ」『群像』(9): 145-171.
- 思想の科学研究会編, 1959, 『共同研究 転向』上, 平凡社.
- , 1962 a, 『共同研究 転向』中, 平凡社.
- , 1962 b, 『共同研究 転向』下, 平凡社.
- Miriam Silberberg, 1990, *Chnging Song: The Marxist Manifestos of Nakano Shigeharu*, Princeton University Press=1998, 林淑美・林淑姫・佐復秀樹  
『中野重治とモダン・マルクス主義』平凡社.
- 杉野要吉, 1979, 『中野重治の研究 — 戦前・戦中篇』笠間書院.
- 武田晴人, 2008, 『高度成長』シリーズ日本近現代史 8, 岩波新書.
- 筒井清忠, [1984] 2006, 『二・二六事件とその時代 — 昭和期日本の構造』ちくま学芸文庫.
- 竹内栄美子, 2009, 『戦後日本, 中野重治という良心』平凡社新書.
- 山之内靖, 1981, 「方法論的序説 — 総力戦というシステム統合」『総力戦と近代化』柏書房.
- , 1993, 「戦時期の遺産とその両義性」『日本社会科学の思想』: 132-170, 岩波書店.